

ホルミウムレーザー前立腺核出術 (HoLEP) において 偶発的に前立腺がんを検出する確率と 関連する因子の検討

中高年男性に多い「前立腺肥大症」。その手術法の一つ「ホルミウムレーザー前立腺核出術 (HoLEP)」施行時に摘出した標本から偶発的に「前立腺がん」を発見することがあります。この度「公益財団法人ときわ会 常磐病院」では、偶発的に前立腺がんを検出する確率と関連する因子について論文にまとめ、日本泌尿器科学会が発行する国際学術雑誌「International Journal of Urology」に掲載されました。

前立腺肥大症の手術後に、追加手術として前立腺がんの手術もおこなうと患者さんに大きな負担を与えてしまうため、HoLEP前の前立腺生検によるがん検出率を高めるためのMRI検査の有用性についてまとめています。

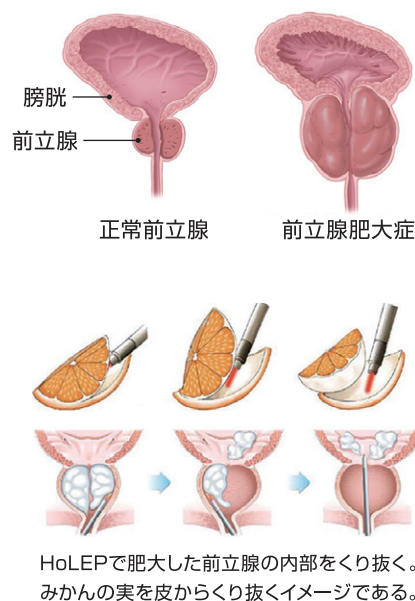
当院では、今後も患者さん一人ひとりに適した医療サービスを提供するため、学術研究も推進してまいります。

背景

- 前立腺肥大症は中高年男性に発症する進行性の疾患であり、侵襲が少ない手術法として前立腺の内部をくり抜くホルミウムレーザー前立腺核出術 (HoLEP) が施行される。
- HoLEPで摘出した標本から偶発的に前立腺癌を認めることがある。その場合、体内に残っている前立腺に前立腺癌が残存している可能性があり、さらに手術などの追加治療が必要で患者にとって大きな負担である。そのためできる限りHoLEP前に前立腺癌の有無を予測することが重要であり、前立腺癌が疑われる患者にはHoLEP前に生検を行い癌と診断して、前立腺肥大症ではなく前立腺癌に準じた治療を行うべきである。しかし、日本国内においてHoLEPによる偶発癌の発見率とHoLEP前の前立腺癌予測因子は未だ明らかでない。

方法

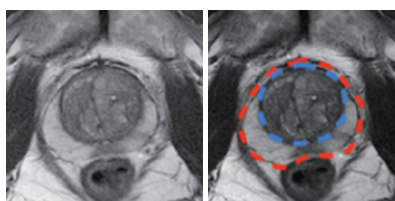
- 2013年7月から2021年9月の期間に、当院においてHoLEPを施行した患者612名を対象とした。
- まず、HoLEPの標本において前立腺癌が指摘された確率を算出した。さらに、ロジスティック回帰分析によって、HoLEPの標本において前立腺癌が診断されることと関係する因子について検討した。



結果

- 612人の患者において、その年齢中央値は73歳であった。また、283人(46.2%)は、HoLEP前に前立腺針生検を受けていたが、前立腺癌を指摘されていなかった。
- HoLEPの標本において前立腺癌を指摘された方は49人(8.0%)であった。
- 多変量解析では、MRIでの前立腺癌疑い病変の有無が、HoLEPの標本において前立腺がんを指摘する独立予後因子であった。一方で、PSA値は関連していなかった。

項目	多変量解析 OR (95% CI)	p値
PSA	1.00 (0.98-1.02)	0.88
MRIでの悪性所見の指摘		
なし	Ref.	
あり	3.83 (2.00-7.35)	<0.001



前立腺MRI画像
赤枠:前立腺全体
青枠:内腺
(HoLEPでくり抜く部位)

考察

- 前立腺肥大症患者において、前立腺癌のスクリーニング検査であるPSA検査の有用性は低い。MRI検査の中でも造影MRI検査が特に有用であり、前立腺肥大症に対して外科的治療が考慮される患者にはその実施が奨められる。
- 前立腺生検による癌検出率を上昇させるため、MRI画像を超音波画像に融合させて前立腺生検を行うMRI-US fusion target prostate biopsyが近年全国的に実施されるようになった。それによりHoLEP前の前立腺生検による癌検出率上昇、HoLEPによる偶発癌の発見率低下が期待される。

今後の展望

- 術後の追加治療によってQOLへの影響が多い若年群には積極的に造影MRIを施行して悪性所見の検索を行う。
- 前立腺生検時にMRIの所見を生検時の超音波画像をリンクさせ穿刺を行い診断率を上昇させるMRI-US fusion target prostate biopsyを導入する。

- 論文タイトル: Detection rate and variables associated with incidental prostate cancer by holmium laser enucleation of the prostate
- 学術雑誌名: International Journal of Urology
- 論文著者: 阪野太郎、中村和貴、金田侑大、尾崎章彦、小内友紀子、大平直、新村浩明
- 論文URL: <https://onlinelibrary.wiley.com/doi/abs/10.1111/iju.14917>



◀ 論文